

祖堂集卷第七

石頭下卷第四曹溪五六代法孫

夾山和尚、花亭に嗣ぐ。澧州に在り。師諱は善会、姓は廖氏、漢廣峴亭の人なり。竜牙山に受業し、年に依りて荊門に受戒せり。後に經論に通じ、時に学海と称す。聡弁天機にして、初め曾つて京口に已に法輪を転じ、後に道吾の指に因りて花亭に參承し、密に玄関に契いて便ち夾岫に棲めり。

師は有る時曰く、夫れ仏有り法有り祖有りてより已來、時人錯り会して謂いて言く、仏辺祖辺法辺、遞代相承して今日に至れり。須らく仏祖法の句意に依り、汝が与に師と為して方^は方字の上に言の字ありめて是なるべし、と。此れに因りて天下、無眼の狂人を出だして、却つて無智と成るは然らず。只、只字の上に他の字ありだ無法の如き本来是れ道にして、一法の情に当たる無し。仏の成す可き没^なく、道の修す可き没^なく、法の捨つ可き没^なし。故に目前に法無し、意は目前に在り。他は是れ目前の法ならず、耳目の到る所に非ず。三乘十二分教は是れ老僧の坐具、祖師の玄旨は是れ破草鞋。寧ろ赤脚なる可けんも、著けざること最も好し。目に瞿曇を觀ること猶お黄葉の如し。

汝若し仏辺に向かつて法を拏せば、此の人未だ眼目有らず。何を以ての故ぞ。此れ皆な所依の法に屬して自在を得ざればなり。本より只だ生死忙忙の法なるが為に、法は識性に依著して自在の分有る無し。千(千字の上に他の字あり)里に善知識を求めて、須らく眼目有り、永く虚謬の見を脱し、幻惑の法に墮せざるべし。(以下方達後人の四字あり)。直に須らく目前の生死、一言に定取し来たり看るべし。為^は復^た実^に有りや実^に無しや。若し人定め得れば、老僧は伊^がれの出頭することを許さん。所以に老僧道つ、糸を千尺に垂るるは、意は深潭に在り、と。語、機を覆つて而も顧みず、舌頭玄にして而も參せず。

・ 当情 認識・感覚の対象となる。

・ 目前無法 意在目前 目の前には何もありません。眞実はありませんと目の前に在る。

- ・ 直須目前生死取一言來看 目前の生死を一言でびたりと言い尽くしてみよ。
- ・ 垂糸千丈、意在深潭 釣糸を千丈も垂らすのは、ねらいが深いところにあるからだ。
- ・ 不顧 そついう語をかえり見ない。
- ・ 不参 そついう舌頭に参じない。

人有りて問つ、如何なるか是れ道。師曰く、太陽の目に溢れ、万里に片雲を掛けず。僧曰く、学人如何にしてか会することを得去らん。師曰く、清潭の水、遊魚自ら迷つ。

- ・ 迷 東西南北が分からない。方角を見失う。自分の居る場所が分からない、決まらない、はっきりしない。

有る大徳発心して行脚し、先の白馬に到つて乃ち問う、承るらく、教中に言有り、一塵の法界の無辺を含む時如何ん。師答えて曰く、鳥の二翼の如く、車の二輪の如し。座主云く、將に謂えり禅宗は別に奇特の事有りと、元來、教乗を出でず。便ち本寺に却歸せり。後に師の出世せるを聞き、少師を遣わして前問を持し、師に問わしむ。師云く、砂を彫りては鑲玉の談無く、草を結んでは道人の思いに乖く。少師却歸して師に拳似せり。師遙かに夾山を礼して讃えて曰く、將に為^{おも}えり禅宗は教と殊ならずと、天然に奇特の事有り。

- ・ 二翼 理事。

- ・ 彫砂無鑲玉之談 砂に彫刻したんでは玉の彫刻とまるつきり縁がない。私は砂を彫っているだけ。
- ・ 結草 私は草を屋根としているだけ。

夾山、後生を著^おかず。仏曰到るに、維那は和尚に参ずることを許さず。仏曰云く、ム甲暫らく来たりて和尚に礼見するのみ、宿ら

ず。維那、和尚に白して云く、今の後生有りて到来し、暫く和尚を礼拝するのみにして宿らず。師乃ち参見することを許せり。仏曰、法堂の塔下に到りて未だ上らず。師云く、三道の宝塔、闍梨は何よりして上るや。仏曰云く、三道の宝塔は曲げて今時の為にす。向上の一路、師に請う、速やかに道え、速やかに道え。便ち塔を上りて和尚を礼拝し了る。

師問う、什摩いすこ処よりか来たる。对えて曰く、天台の国清寺より来たれり。師曰く、承り聞くに、天台に青青の水、淥淥ろろ原作緑緑の波有りと。子の遠来せるを謝す、子意如何ん。对えて曰く、久しく岳谷に居るも森羅を掛けず。師曰く、此は猶お是れ春意、秋意は如何ん。仏曰無对。師曰く、君を見るに只だ是れ撐船の漢にして、終つひ歸いに是れ弄潮の人ならず。

福先代わつて云く、涼風、落葉を吹きて、高低、意に任せて遊ばしむ。鳳池拈じて僧に問う、作摩生か祇对せば撐船の漢たることを免れ得ん。对えて曰く、和尚自ら出で来たるを待ちて即ち商量せん。鳳池曰く、若し出で来たる時、作摩生か商量せん。僧無对。自ら代るらく、預め搔きて痒きを待つ可からず。又た代わつて二ニ原作問く、若し到らば、什摩の道い難きことが有らん。

・不著 ありつけない。

・不掛森羅 つたの衣を着はしない。山の主にならない。

・撐船漢 船頭。

・弄潮人 高潮を乗り切る船頭。

・預搔而待痒 ばかばかしい手廻しのよさ。諺。

・終歸 ついに、畢竟、つまるところは。俗語。

師又た問うて曰く、什摩人と同行と為るや。对えて曰く、木上座なり。師曰く、什摩処にか在る。对えて曰く、堂中に在り。師曰く、喚び来たれ。仏曰便ち堂に歸り、柱杖を取りて師の前に抛下せり。師云く、天台より採り得来たれること莫きや。对えて曰く、五岳の生む所には非ず。師曰く、須弥頂上より採り得来たること莫きや。对えて曰く、月宮にも曾つて逢わず。師曰く、与摩ならば則

ち人より得るなり。対えて曰く、自己すら尚お怨家、人より得て什摩を作すにか堪えん。師曰く、冷灰裏に豆子爆く。師は維那を喚ぶらく、明燈下に向かつて安排著せよ。

・木上座 柱杖。しばしば法身に譬えられる。

・怨家 かたき。

・著 命令を表す。

又た問う、汝の名は何摩ぞ。対えて曰く、仏曰。師曰く、日は什摩処にか在る。対えて云く、日は夾山の頂上に在り。師曰く、与摩ならば則ち一句を超え得ざるなり。

師、大衆をして地を鑽せしむる次いで、仏曰、茶を傾けて師に与う。師、手を伸べて茶を接する次いで、仏曰問う、儼茶三兩坑、意は鑽頭辺に在り、速やかに道え、速やかに道え。師云く、瓶に孟中の意有り、籃中幾個の孟なりや。対えて曰く、瓶に茶を傾むくるの意有り、籃中に一孟も無し。師曰く、手に夜明符を把つて、終に天暁を知らず。

・儼茶 濃く苦い茶。

・手把夜明符云 夜明符を天暁と感ちがする。

羅秀才問う、請つ和尚、破題せよ。師曰く、竜に竜軀無し。本形を犯すを得ず。秀才云く、竜に竜軀無しとは何ぞ。師云く、老僧を道著することを得ず。秀才曰く、本形を犯すを得ずとは何ぞ。師云く、境地を道著するを得ず。

・請和尚破題 テーマをひとつ立ててください。破は先鞭をつけること。

・竜無竜軀 竜のからだを持たない竜とかけて何と解く。

- ・ 不得犯於本形 竜の形に関する言葉を使つてはならぬ。
- ・ 不得道著老僧 わしのことを引き合いに出してはいかん。

又た問う、如何なるか是れ夾山の境地。師答えて曰く、猿は子を抱いて帰る青嶂の後、鳥は花を銜んで落とす碧巖の前。座主出て来たつて便ち問う、三教を洞明する底の人、還た此の理に通ずるや。師云く、夜月の明珠は天暁に如かず。又た問う、等妙二覚底の人、還た此の理に通ずるや。師云く、金雞玉兔は魚父の手に墮ちず。座主曰く、此の意如何ん。師云く、句中に法無く、意は人を度せず。座主曰く、歩歩に蓮華を踏むは猶お是れ今時の昇降、螺髻向上の事、乞う師一言せよ。師云く、鉄牛は声無し、之を聞くを用いず。

- ・ 猿抱帰青嶂後云 山中のおのずからなる動静の諧和。

師、雲蓋に問う、近ごろ什摩処いすこを離れしや。对えて云く、近ごろ朗州を離れたり。師曰く、此間すかんに路無し、你争でか這裏に到るを得ん。对えて云く、既に路無し、什摩に因りて人の這裏に到る有りや。師は之を許せり。

- ・ 因什摩有人到這裏 わたしはちゃんとここに来ているではないですか。

師、法志に問う、近ごろ什摩処を離れしや。对えて云く、近ごろ朗州を離れたり。師曰く、什摩をか作なし来たる。对えて云く、和尚の跡を尋ぬ。師曰く、老僧は動歩せず。你は什摩処に向かつてか尋ぬ。对えて云く、咄、墮根の漢。師曰く、未だ閻梨を屈せず。对えて云く、動歩せざるは豈に是れ屈せざるならんや。師便ち失声す。

- ・ 墮根漢 氣の利かない奴。唐変木。石みたいな鈍な奴。
- ・ 屈 枉屈。怒らせるような悪いことをする。

師、僧に問う、什摩処より来たるや。對えて云く、新豐より来たれり。師曰く、彼中かしこは是れ什摩人が道首なる。對えて云く、上の字は是れ良、下の字は价。師云く、吾れ識り竟れり。

又た問う、什摩の仏法の因縁有りや。汝拳し看よ。其の僧便ち拳して云く、和尚、衆に示して曰く、鳥道を行かんと欲せば須らく足下無系なることを得べし。玄学を得んと欲せば展手して而うして学べ、と。師、頭を低却す。其の僧便ち礼拝して問う、某甲初めて藜林に入り、洞山の意旨如何んを会せず。師云く、貴ひたすら千里の抄を持ち、林下に道人悲しむ。其の僧礼拝して退きて立つ。

師云く、咄、者の阿師こ近前来せよ。僧便ち近前して立つ。師云く、ム甲初めて先師に見えしとき、先師、ム甲に問えり、阿那个の寺裏に住すや。某甲對えて云く、寺は則ち住せず、住するは即ち寺ならず。先師曰く、什摩の爲の故に此くの如きや。某甲對えて云く、目前に寺無し。先師曰く、什摩処より此の語を学得し来たるや。某甲對えて云く、耳目の到る所には非ず。先師云く、一句合頭の意、万劫の繫驢櫛。

如今改めて四句の偈と爲して曰く、目前無法、意は目前に在り。他そは是れ目前の法ならず、耳目の到る所には非ず。某甲に贈物の閻梨に与つる無し。這个は是れ老僧の先師に見えし因縁にして、囊中の宝なり。將ち去りて諸方に拳似せよ。若し人の弾得破する有らば来たる莫れ。若也もし人の弾得破する無くんば、老僧に却還せよ。

其の僧便ち辞して洞山に却歸せり。洞山問う、阿那裏にかゆ去き来たる。對えて云く、夾山に到れり。洞山曰く、什摩の仏法の因縁か有りし、汝拳し看よ。對えて云く、彼中かしこの和尚、当頭の因縁を問えり。某甲は情切にして彼中の和尚に拳似せり。洞山曰く、什摩の因縁をか拳せる。僧曰く、某甲拳すらく、和尚、衆に示して曰く、鳥道を行かんと欲すれば須らく足下無系なることを得べし、玄学を得んと欲すれば展手して学べ、と。洞山便ち失声して云く、夾山は什摩と道いしぞ。對えて云く、貴ひたすら千里の抄を持って、林下に道人悲しむ、と。洞山云く、灼然たり、夾山は是れ作家なること。

夾山の小師、当時洞山に在り。洞山、小師に教すらく、徐速やかに去け。是れ徐が和尚、夾山に在りて二百の衆を匡し、是くの如

き次第有り。小師対えて云く、某甲の和尚に仏法無く、兼ねて夾山に在らず。其の僧、小師に向かつて云く、旧時は則ち合山なるも、如今は改めて夾山と為すなり。小師方始めて信を得たり。便ち洞山を辞して本山に却歸せり。纔かに門前に到るや、高声に哭して入り、和尚に向かつて説う、某甲は是れ師の初めて住山せし時、和尚の与に何事か造作せず、何事か経曆せざりし。与摩の奇特の事有るに、当時什摩に因りてか某甲の与に説わざる。和尚云く、当初の時、是れ侂は瀟米し、老僧は焼火せり。是れ汝は行飯し、老僧は展受せり。又た我の什摩処を恠しむや。小師便ち悟れり。是れ韶山和尚なり。

・彼中 あそこ。俗語。

・情切 どうしても押さえきれなくて。

・兼 そして。英語の and に当たる。

・瀟米 淘米に同じ。

問う、迷子の家に帰る時如何ん。師云く、家は破れて人は亡す、子は何処にか帰らん。僧云く、旧時の人を見んと欲得せざる時如何ん。師答えて云く、庭前の残雪、日輪消し、室内の遊塵、誰れをしてか掃かしめん。

問う、迅速にして停まらざる時如何ん。師云く、眼有るも天子の楽を窺わず、目前に老僧の歌を弁取す。

・弁取 聞き分ける。

問う、南北は則ち問わず、和尚の足下の事如何ん。師云く、砂を彫りては鑲玉の機無く、草を結んでは道人の目を虧く。

・彫砂 彫云。前出。

一座主有りて師に參ず。師問う、久しく何の業をか習う。对えて云く、法花經、心に留まる。師云く、法花經は何を以てか極則と爲す。对えて云く、露地の白牛をば極則と爲す。師云く、愛でて舍那の服と瓔珞の衣とを著け、駕するに白牛を以てして此の道場に届けるは、豈に是れ座主の家風ならずや。对えて云く、是なり。師曰く、傍辺に今の樑根の迦葉有り、起ち来たつて肯わず。諸子は幼稚にして惟だ知る所無し。老僧が者裏は百草頭に一鑽を与う。座主、向上の一路、富貴の処、何に因りてか問わざる。座主曰く、与摩なれば則ち第二月有るなり。師云く、老僧要し日頭を坐却せば天下黯黒（茫）原作忙然たる者、地に（おまね）天に普ねからん。座主問う、如何なるか是れ向上の一路、富貴の処。師云く、雪峯の外に滴（？）して白雲掛けず、座主作摩生（そまさん）。師又た云く、一句子あり、十方共に參ず。一句子あり、天下（い）何んともせず。一句子あり、天下人を活却す。一句子あり、天下人を死却す。巧拙は時に臨んで自ら看よ。所以に道う、貴（ひたす）ら千里の抄を持ち、林下に道人悲しむ、と。直得（た）い靈草掛けざるも、猶お九五の位には非ず。明珠夜月は是れ天暁ならず。

・老僧要坐却日頭 要は、もしの意。坐却は、却が着くと他動詞の意味合いをもつ。

・巧拙 一句子の。

・不掛 身に着けない。

問う、如何なるか是れ沙門行。師云く、動けば則ち影現れ、覺れば則ち病生ず。

欽山、侍者をして師に問わしむらく、学人、身を斬りて千断せんと擬欲（ほ）す、誰人が手を下さん。師云く、道に横徑無くんば立つ者皆な危うし。侍者又た問う、風に当たつて颺（た）殻する時如何ん。師云く、者裏に風無し、什摩をか颺げん。侍者又た問う、青山に霞無し、雲は何よりか生ずる。師云く、駿馬は峯骨を露わさず、朗然として清虚なり。侍者云く、駿馬、何にか在る。師曰く、蒲麻もて針を作り、布袋を箆し入らず。白雲千丈の線（いと）、碧潭に寄在す。浮定有無、三寸に鉤せらるることを離れて、子何ぞ問わざる。侍者却帰

して欽山に拳似せり。欽山云く、夾山は是れ作家なり。

・颶殻 簸る。俗語。

・霞 色のついた雲。

・朗然清虚 青山は。

漳南、此の因縁を拏す。僧便ち問つ、道に横経無くんば立つ者皆な危つし、与摩に道うは只だ是れ道を説き道を話すのみ。未審し、如何なるか是れ道。漳南云く、大家惣べて汝を颶る。

・如何是道 どういづのが夾山の道でしょうか。

・大家物颶汝 みんながお前に目を付けているぞ。

師、僧をして石霜に問わしむらく、如何なるか是れ一老一不老。霜云く、白雲は徐の白雲たるに聴す、青山は徐の青山たるに聴す。其の僧却歸して師に拳似せり。師云く、門前の把弄は、老僧が入理の譚に如かず。他の三步を欠く。

・一老一不老 卷二十隱山章の隱山の偈に青山白雲父、白雲青山母、白雲終日依、青山都不知。欲知此中意、寸歩不相離。これに和した洞山の頌に、道無心台人、人無心台道。欲知此中意、一老一不老」とあるのによる。

・白雲聴徐白雲 白雲は白雲の好きなように。

・欠他三步 もう三步ほしいところだ。他には全く意味はない。軽くそえた語。

師、天門より夾山まで首尾原作未十二年、前を通じて凡そ三処に法輪を転じたり。中和初年辛丑の歲十一月七日に至りて、自ら門屋を焼却し、衆に謂いて曰く、苦なる哉、苦なる哉、石頭の一枝埋没し去るなり。樂浦出で来たつて云く、他原作也の埋没し去るに

聴ず、自ら青竜の在る有り。師問う、青竜は意旨如何ん。対えて曰く、貴人は衣を借りず。師便ち救火す。

此れに因りて偈を造りて曰く、大江沈み尽くして小江現れ、明月高峯より法自ら流る。石牛水上に臥して、影は孤峯頭に落つ。荒田に我が語を聞くに、不繫の船に同じきが如し。

師便ち化を示せり。春秋七十七、僧夏五十七。夾山に塔す。傳明大師永済の塔と謚号す。韶州勅史金叢、碑文を撰せり。

・ 聴他埋没去 埋没したつていいでしょう。

・ 自有青竜在 ちゃんと青竜はいるんです。

巖頭和尚、徳山に嗣ぐ。鄂州唐寧に在りて住す。師諱は全歳、俗姓は柯。泉州南安県の人なり。靈泉寺義公下に受業し、長安の西明寺に於いて戒を具し、業を成す。涅槃經を講じ、後に徳山に参ぜり。

初めて到り参ずるや、始めて坐具を展べて礼を設けたり。徳山、杖を以て之を挑げ、遠く堦下に擲てり。師因りて便ち堦を下り、坐具を収めて相看せり。主事参堂せしむ。徳山諦視すること久しくして自ら曰く、者の阿師、一个の行脚人に欲似たり、と。私かに記して懐に在り。

来晨、師は法堂に上りて参ず。徳山問う、閻梨は是れ昨晚の新到、豈に是ならずや。対えて云く、不敢。徳山云く、什摩処よりか虚頭を学得し来たる。師云く、専甲は終に自ら誑さず。徳山呵して云く、他は向後、老漢の頭上に痾著せん。師礼して密機を退蔵す。

・ 自白 一人言を云つた。

・ 者阿師欲似一个行脚人 こいつはいけそつな奴だ。欲似は俗語で、英語の looks like に当たる。

・ 虚頭 実頭の反対、八方破れ、無内容。

・ 専甲終不自誑 それが私のありのままのところですよ。専甲は某甲に同じ。

・ 老漢頭上痾著 わしの頭の上にくそをするだろう。

既に盤泊するもの数戴にして尽く玄旨を領せり。初め臥竜に住し、後に岳頭に居す。

人有りて問う、僕従を去却して、直に請う、臥竜の相見せんことを。師云く、眉毛を貶上し看よ。

曜日頌、機に当たつて直下に真を現前す、語を認むるの徒は未だ親しむ可からず。本色の先随も憚懼するが如し、岳頭の樞檜鎮長つねに新たなり。

・ 本色 生地まる出しの。

・ 憚懼 はじる。眼憚懼は寝呆けまなこ。

時に三人有りて同に礼拝し、未だ問を申へず。師云く、三人俱に錯れり。三人黙して言無し。師便ち出でよと喝す。東山代わつて云く、只だ和尚の語無きことを怕る。雲門代わつて云く、和尚も亦た過無きことを得ず。

・ 喝出 出で行けと大声でどなること。

・ 只怕和尚無語 和尚さんも無語じゃございせんか。

問う、如何なるか是れ毘廬の師。云く、汝は什摩と道つぞ。学人、問を申べんと擬すほ。師、出でよと喝して云く、鈍漢。

問う、古今を歴ざる事如何ん。師云く、卓朔底。又た問う、古今を歴る事如何ん。師云く、爛るるに任する底。

・ 卓朔底 突つ立っているもの。卓朔は、石塔や柱をすぼんと立てること。

・ 任爛底 くさっているもの。

問う、三界競い起こる時如何ん。師云く、坐却著せよ。僧曰く、未審し、師意如何ん。師云く、廬山を移し將ち来たらば則ち徐に向つて道わん。

・坐却著　びじつと坐つておね。じつと坐つておね。著は命令を表す。

羅山問う、和尚は豈に是れ三十年洞山に在りて、又た洞山を肯わざるならずや。師云く、是なり。羅山云く、和尚は豈に是れ法、徳山に嗣ぎて、又た徳山を肯わざるならずや。師云く、是なり。羅山云く、徳山を肯わざることとは則ち問わず、只だ洞山の如きんば、何の虧闕か有る。師良久して云く、洞山は好个の仏なるも、只だ是れ光彩(原作奴)無し。

・好个　立派な。

・只是無光彩　しかし惜しいことに光明がない。卷九羅山章参照。只是は、元來の意味はただヨク／＼ひたすらに。しかし、の意味になつて来るのは唐末頃から。

雪峯、徳山に問う、従上の宗乘、和尚の此間には如何に稟けて、人に授与するや。徳山云く、我が宗に語句無く、實に一法の人に与つる無し。師、拳するを聞きて云く、徳山老漢は、一条の背梁骨は拗不折なり。此くの如しと雖然も唱教中に於いて猶お妙子を較す。

・猶較妙子　もう一つだめだ。

保福拈じて長慶に問う、岳頭は平生出世して、什摩の言教の徳山に過ぐる有りて、便ち猶お些子を較すと道つや。長慶拳す、師岳頭(衆)に示して云く、若し是れ意を得る底の人ならば、自ら解く活計を作さん。拳措悉く皆な索索底にして、時長に恬恬底なり。触物則ち伝えて、意は伝つる処に在り。住まるときは則ち住まふことを覚し、去くときは則ち去くことを覚す。須らく去かんと欲して去

かず、住まらんと欲して住まらざる処に於いて躰会すべし。物を執らず、物に抛らず、窒塞せる人の緊く事を把著して、伝え得ること解あわざること、恰も死人の玉を把り玉を擣るに似て相い似るに同じからず。縦然たい伝え得るも、直に驢年に到るまで什摩の用処か有らんと。且かたじく愧けなし、伊かれ（岳頭）這裏に向かつて湊泊せば、別に運為せず。訝し將ち去り、鑽し將ち去り、研し將ち去りて直に透過せしめ、直に通徹せしめん。道つを見ずや、人の射を学ぶが如きは、久久にして方はめて中る、と。人有りて問う、中る時如何ん。師長慶（云く、痛痒を識らざること莫きや。保福云く、今日は唯だ話を拏せるのみには非ず。慶云く、是れ什摩の心行ぞ。

・索索底 意味ありげな所がない。

・窒塞人 閉じこもっている人。

・躰会 体そのものとして会得する。

・且愧 以下長慶の挨拶。愧は俗語で、ありがたやの意。

・訝 不詳。

問う、如何なるか是れ祖師西来意。師云く、廬山を移取し来たらば你に向かつて道わん。師云く、徳山老漢は只だ目前の一個の白棒に憑りて曰く、仏来たるも也た打ち、祖来たるも也た打つ、と。此くの如しと雖然いえども、些子を交す。

・交些子 もつひと息だ。交は較に通じる。

問う、如何なるか是れ祖師西来意。師云く、又た与摩にし去るなり。

問う、如何なるか是れ岳中的の意。師云く、什摩と道つぞ。請う、和尚答話せよ。師云く、閻梨の指示するを謝す。

師、雪峯と共に山下の鵝山院に到るに、雪に壓せらるるもの数日。師は毎日只管ひたすらに睡り、雪峯は只管に坐禅せり。七日を得し後、雪峯便ち喚ぶ、師兄すしん且らく起きよ。師云く、作摩。峯云く、今生、便りを著けず。文遂この漢と共に数処に行きて、他に帯累せらるることを被れり。今日、師兄と共に此に到るに、又た只管に打睡す。師便ち喝して云く、侖も也た瞳眠し去る。毎日、長連床上に在りて、恰も漆村裏の土地に似て相似たり。他時後日、人家の男女を魔魅し去らん。峯、手を以て点胸して云く、某甲が這裏は未だ穩やかならず。敢えて自ら諷かず。師云く、我は將に謂えり、汝は他時後日、孤峯頂上に向いて草庵を盤結し、大教を播揚せんと、猶おこのの語話を作すか。峯云く、実に未だ穩やかならず。師云く、汝若し実に此くの如ければ、汝が見処に抛りて道い將ち来たれ。峯云く、某甲初め塩官に到りて、色空の義を觀ずることを説くに因りて、この入処を得たり。又た因みに洞山曰く、切に忍む他に随つて覓むることを、迢迢として我を去りて疎からん。我は今独自に往き、処処に渠に逢うことを得。渠は今正に是れ我なるも、我は今是れ渠ならず。応に須らく与摩に会すべし、方めて如如に契うことを得ん、と。

師便ち喝して云く、若し与摩ならば則ち自ら救うすら也た未だ徹せず。峯云く、他時後日作摩生そもせんならん。師云く、他時後日、若し大教を播揚し去らんと欲得せば、一一個、自己の胸襟の間より流し將ち出で来たり、他そを与えて盖天盖地し去らしめよ。峯、此の言下に於いて大悟せり。便ち礼拜して起ち来たり、連声して云く、便ち是れ鵝山成道なり。

・ 不著便 ついてない。

・ 侖也瞳眠去摩 お前だつて眠っているな。

・ 土地 土地神の略。

・ 以手点胸 胸を指さして。

・ 未穩在 まだ落ち着かない。在は強調の助詞。

・ 流将出来 流出将来の古い言い方。

・ 連声 三度つづけて言うこと。

二人分襟せし後、師は鄂州に在りて沙汰に遇い、只だ湖辺に在りて渡船人と作れり。湖の両辺に各おの一片の板有り、忽し人の過ぐる有らば、板を打つこと一下す。師便ち槓子を提起して云く、是れ阿誰ぞ。對えて云く、那邊に過ぎんことを要す。師便ち船を刳（原作刳）ぎて過ぐ。

雪峯は福州に往きて卓庵せり。沙汰を過ぎし後、忽ち両側の納僧の來たる有りて和尚を禮拜せり。和尚は纔かに上來するを見るや、手を以て木に托し、庵の門より放身して外に出て云く、是れ什摩ぞ。其の僧對えて云く、是れ什摩ぞ。峯便ち低頭して庵裏に入れり。其の僧、三五日の後便ち辞す。峯云く、什摩処にか去く。對えて云く、湖南に去く。峯云く、我に同行の彼に在る有り。汝に信子を付せん、得たりや。僧云く、得たり。雪峯遂に信を作れり。信に云く、一たび鵝山に成道せしより後、今に至るに迄れり。（以下、師兄一自鵝山成道後迄至今同參の十五字あり。重複と脱文とがあるようである）某の信、付して師兄に上る、と。

其の僧、庵頭に到れり。師問う、什摩処より來たる。云く、南方より來たる。師云く、雪峯に到りしや。對えて云く、到り來たり。時に信の和尚に上る有り。便ち書を抽きて師に過与す。師接得して便ち問う、他は近日、什摩の言教有りや。僧云く、某甲初めて到りし時、一則の因縁有り。具さに前話を拳せり。師云く、他は什摩と道いしぞ。對えて云く、他に語無し、便ち低頭して庵に入れり。師便ち掌を拍つて云く、噫、我当初、伊に向かつて最後の一句を道わざりしことを悔ゆ。我若し他に向かつて最後の一句を道いしならば、天下人は雪峯を奈何んともせざりしならん。其の僧、夏末に到り、具さに前の因縁を陳べ、師に問うて云く、師は道えり、我、伊に向かつて最後の一句を道わざりしことを悔ゆ、と。如何なるか是れ最後の一句。師云く、汝は何ぞ早く問わざる。僧云く、某甲敢えて容易にせず。師云く、徳山と同根に生ずると雖も、雪峯と同枝に死せず。汝、最後の一句を識らんと欲せば、只だ這個便ち是なり。

・ 纔くするや否や。

・得摩 よろしいか。

・過与 手渡す。

・接待 受け取る。

・末後一句 ぎりぎり決着の一句。

・容易 心易く、おいそれと。

・只這个便是 これこそがそつだ。これこのとおり。

師は沙汰の時、欄衫を着け、席帽を戴き、師姑の院裏に去けり。師姑の飯を喫するに遇う次いで、便ち堂堂と厨下に入り、便ち自ら飯を討めて喫せり。小師来たりて見、師姑に報らせたり。師姑、柱杖を把りて来たり、纒かに門を跨ぐや、師便ち手を以て席帽の帯を抜き起こせり。師姑云く、元来是れ歳上座なり。師に出で去れと喝せらるることを被れり。

・欄衫 はでな着物。役者の服装。

・席帽 砂ぼこりを防ぐ耳かくしの垂れのついた帽子。

・元来是歳上座 なんだあんただったのか

大彦上座、初めて師に参見す。師、門前に在りて草を芒る次いで、彦上座、笠子を戴きて堂堂として来たり、直に師の面前に到り、手を以て笠子を拍ち、手を提起して云く、還た相い記在するや。師は拈得して草を把り、欄面に一擲を与えて云く、勿処、勿処。他は無語。便ち師の三摺を与うることを被れり。後に威儀を具して始めて法堂に上らんと欲す。師云く、已に相見し了れり、上來するを要せず。彦便ち転ず。来朝に到りて喫粥し了り、又た上りて始めて方丈の門を跨がんとす。師便ち透して床を下り、欄胸に一擒して云く、速やかに道え、速やかに道え。無对。師に推し出さるることを被れり。大彦嘆じて曰く、我は將に謂えり、天下に人無し、と。

元来老大虫有り。

・ 勿処 不詳。

・ 被師与三摺 三度ゲンコツでなぐられる。

・ 透 跳ねる。

・ 将謂・元来・・とばかり思っていたら、なんと・だった。

・ 大虫 虎。

疎山、師に参見す。師纒かに見るや却つて低頭し、佯伴として睡れり。疎山近前して立つこと久し。師並びに管せず。疎山便ち手を以て禅床を拍ち、手を引くこと一下す。師、頭を廻らして云く、什摩をか作す。山云く、和尚且らく瞌睡せよ。師呵呵大笑して云く、我は三十年馬騎を弄し、今日驢子に撲なぐたることを被れり。

・ 佯伴 洋洋 ぼつとしているさま。

・ 和尚且瞌睡 和尚さん、ま、どうぞお睡り下さい。

因みに偽山和尚、廊下に於いて壁に泥する次いで、李軍容、公裳を具して、直に來たりて偽山に詣り道を訪う。偽山の背後に到りて笏を端して立てり。偽山、首を廻らし、便ち泥盤を側てて泥を進むる勢を作せり。侍朗便ち笏を転じて泥を進むる勢を作せり。偽山当下に泥盤を抛ち、侍郎と臂を把つて方丈に帰れり。師は後に此の語を聞きて云く、噫、仏法は已後澹薄にし去らん。多少の天下の偽山、壁に泥することも也た未だ了ぜず。

・ 公裳 官服。

・ 作接泥勢 泥を受け取るかっこうをした。

・澹薄去也 あつみが無くなつていく。

・多少天下偽山 天下の偽山ともあるう人が。

夾山に僧有り石霜に到り、纒かに門を跨ぐや便ち問う、不審。石霜云く、必ずしもせず、閻梨。僧云く、与摩ならば則ち珍重。其の僧、後に岳頭に到り、直に上りて便ち云く、不審。師云く、嘘。僧云く、与摩ならば則ち珍重。始めて身を廻らさんと欲す。師云く、後生なりと雖^{いよと}も亦た能く管帶す。其の僧却歸し、夾山に拳似せり。夾山上堂して云く、前日、岳頭と石霜とに到りし底の阿師、出で来たつて、如法に拳著せよ。其の僧纒かに拳し了るや、夾山云く、大衆還た会するや。衆無対。夾山云く、若し人の道う無くんば、老僧両茎の眉毛を惜しまず道い去らん。却つて云く、石霜は殺人の刀有りと雖も、活人の劔無し。巖頭は亦た殺人の刀有り、亦た活人の劔有り。

・管帶 管とは心に確保すること。帯は身に着けて離さないようにすること。

百丈垂語して云く、与摩にして与摩ならず、と。人有つて師に拳似す。師云く、我は与摩に道わす。便ち云く、与摩にして与摩、与摩ならずして与摩ならず。与摩に会するもの千人万人の中、一个半个を得ること難し。

長慶、羅山と臨水の宅に在り、此の因縁を拳して便ち羅山に問う、与摩にして与摩ならざるは則ち問わす。与摩にして与摩、与摩ならずして与摩ならざるは意作摩生。羅山云く、双明亦た双暗。慶云く、作摩生か是れ双明亦た双暗。羅山云く、同生不同死。此の後、人有りて長慶に問う、如何なるか是れ同生不同死。慶云く、彼此、口を合取せよ。其の僧却つて羅山に拳似す。羅山便ち肯わす。其の僧便ち問う、如何なるか是れ同生不同死。羅山云く、大虫に角を著くるが如し。如何なるか是れ同生同死。羅山云く、牛に角無きが如し。

・彼此 同生不同死の二人。

・合取口 口を閉じよ。

師、徳山を辞す。徳山問う、什摩処にか去く。對えて云く、暫らく和尚を辞す。徳山云く、子は後作摩生。對えて云く、忘れじ。徳山云く、既然に此くの如し、什摩に因りて山僧を肯わざるや。師對えて云く、豈に道うを聞かずや、智慧、師に過ぎて方めて師の教えを伝う、智慧若し師と齊しければ、他後恐らくは師の徳を減ぜん、と。徳山云く、是くの如し、是くの如し。应当に善く護持すべし。

問う、如何なるか是れ切急の処。師云く、什摩と道うぞ。僧無對。師便ち頌有り、適来声に和して送るに、低頭して事を会せず。此中の意を知らんと欲せば、雲裏に光彩有り。

・切急処 末期のところ。

・道什摩 お前なんの話ししてるのか。

問う、如何なるか是れ仏法の大意。師云く、小魚、大魚を吞む。

・小魚吞大魚 自らをおとしめなさんな。

自余の枢要、玄猷を尽くす莫し。

師は平生預め一言有り、者の老漢去る時、大吼一声了了って去らんと。中和五年乙巳の歳を以て、天下は乱に罹り、凶徒熾盛なり。師は四月四日に於いて、償債して終われり。刃に臨むの時、大叫一声せり。四山に迴避せる人、悉く其の声を聞けり。春秋六十、僧夏四十四。東吳の僧玄泰、銘を制して云く、善悪二境、逆順に取捨す。二祖大師と、師子尊者と。清儼大師出塵の塔と勅謚す。

雲峯和尚、徳山に嗣ぐ。福州に在り。師、諱は義存、泉州南安県の人なり。俗姓は曾。師は生れてより薫食を隔て、戯は群遊せず。識環の年に於いて居然として俗に異なる。童と為るの歳に及びて親を辞し、莆田県の玉澗寺に於いて、慶玄律師に依りて以て受業せり。

武宗の澄汰に値い、服を変えて芙蓉山に造り、冥契するが若き有りて、円照大師の詢いて撰受することを蒙れり。大中即位するに至りて、仏宇重ねて興れり。即ち四年庚午の年、幽州の宝刹寺に詣りて具戒せり。是れより講肆(原作律)を尋ねず、唯だ宗師を訪ぬるのみ。法筵を遍歴して、方に武陵に造る。

纔かに徳山に見るや、宿契に逢うが如し。便ち問う、従上の宗乗の事、学人は還た分有りや。徳山起ち来たつて之を打つて云く、什摩と道うぞ。師、言下に於いて旨要を承け、対えて云く、学人、罪過。徳山云く、己身を擔負して、他に軽重を詢う。師、礼謝して退く。斯れ謂く、面、秦鏡に臨んで、眼に親躬を鑒て猜無し。己の疑いに非ずして、復た何をか言いて属せん、と。既にして摩尼の掌に現れ、滄溟を探るを罷む。身は役して心は閑かに、盤泊するもの数戴なり。後に錫を甌閩に返し、雪峯を卜し、衆は一万余人に上れり。師、神情は恒に蕩やかにして而も厲しく、容止は怡憚にして而も威し。行けば則ち遠近奔り随い、坐せば則ち森然として擁り遶る。

・罪過 わるつごいしました。

・斯謂 これはまさしくこうついう意味だ。

有る時上堂して云く、汝諸人、者裏に来たりて什摩をか覓むる。相い鈍致せんことを要むること莫きや。便ち起ち去る。

・莫要相鈍致摩 わしを虚仮にしよつといつつもりか。(そうならまだいいが、それでもななければ返れ)。鈍致は鈍置に同じ。目もくれない。手も足も出ない状態にする。頭が上がらなくする。祖庭事苑卷一の解は誤。

有る時上堂するに、衆立つこと久し。師云く、便ち与摩に承当却すれば、最も省要あるに好し。更に這の老師の口裏に到り来たらしむること莫れ。三世諸仏は唱つる能わず、十二分教は戴不起、如今の涕唾を嚼む漢、争でか会するを得ん。我は尋常、師僧に向かつて道う、是れ什摩ぞ、と。便ち近前し来たりて答話の処を覓む。驢年にも識り得んや。事、已むことを得ず、汝に向かつて与摩に道うすら、已に是れ汝を平欺し了れり。汝に向かつて道う、未だ門を^{また}跨歩なり。口化の反^すがざる以前、早に汝と商量し了れり。還た^は会すや、亦た是れ老婆心なり。省力の処は肯えて当荷せず、但知^た踏歩向前して言語を覓むのみ。汝に向かつて道う、尽乾坤是れ个の解脱の門なるに、惣べて肯えて入らず。但知^た裏許に在りて乱走し、人に逢著すれば便ち問う、阿那个^たか是、我は還た著くるや、と。只だ是れ自ら屈を受くるのみ。所以に道う、河に臨んで水に渴き、死人無数、飯糶裏に餓を受くる人恒河沙の如し、と。將つて等閑にすること莫れ。

和尚子、若し実に未だ悟入することを得ざれば、直に須らく悟入して始めて得べし。空しく時光を度らざれ。只だ是れ傍家に相い徹め、掠虚に説を嫌つこと莫れ。悟入は且らく阿誰れ分上の事なりや、亦た須らく精神を著くべくんば好し。菩提達摩来たりて道う、我は心を以て心に伝えて文字を立てず、と。且らく作摩生か是れ汝諸人の心なる。只だ是れ乱統にし了つて便ち休し去る可からず。自己の事若し明めざれば、且らく何処より如^{そこ}許多の妄想を出で得ん。這裏に向かつて凡を見、聖を見、男女僧俗、高低勝劣有るを見て、大地面上の炒炒底の鋪砂に相い似て、未だ嘗つて一念も暫く神光を返さず、生死に流浪し、劫尽きても息まず。慚愧、大いに須らく努力すべくんば好し。

・ 便与摩承当却 与摩は、緊張した沈黙の時間の有ったことを示すか。

・ 是什摩 何であるか。何だそれは。この句には主語がない。その主語はこの問いを浴びせられた者が自らに据えねばならない。問題の根原へ目を向けさせるための鋭い示唆として発せられる。

・ 嚼涕唾漢 人の言葉を有難がつていつも咀嚼している奴。

- ・平欺 あなどる。欺は元来あなどる。あざむく意はない。
- ・省力 手間ひまをはぶく。
- ・当荷 背おいこむ。
- ・我還著摩 一体オレはそれを握んでいようか。
- ・飯糰裏受餓人 めしびつの中に居ながらハラペコの者。
- ・著精神 しつかりやる、がんばる。
- ・好 勸奨の語気を添える。
- ・乱統 でたらめなことをする。やみくも。
- ・炒炒底 不詳。
- ・慚鬼 感嘆詞としては、ありがとう、の意。

問う、寂然無依の時如何ん。師云く、猶お是れ病なり。進んで曰く、転ぜし後如何ん。師云く、船子、楊州に下る。

・船子下楊州 しあわせな船旅。楊州は、当時地上の天国と見なされていた町。

僧問う、承るらく、古人に言うこと有り、と。師便ち倒臥し、良久にして起ち来たる。師云く、什摩をか問う、什摩をか問う。学人再び問を申ぶ。師云く、虚生浪死の漢。

問う、箭路、鏢に投ずる時如何ん。師云く、好手は的中でず。眼を尽くして標勿なき時如何ん。師曰く、随分に好手なることを放ゆるさず。

保福拈じて長慶に問う、既に眼を尽くして標勿なきに、什摩と為てか全く好手なることを許さずや。慶云く、還た与摩なりや。福云く、好手なる者作摩生。慶云く、当たらざる即ち道なり。保福云く、和尚の領話せるを謝す。自ら云く、礼拝著せよ。

・好手 名人。

・不当即道 ピタリと道と対応しないものこそ道だ。

・謝和尚領話 話が解つていただいたことを感謝します。

・自云礼拝著 自分で自分に向かって言った。

問う、古人道う、路に達道の人に逢わば、語嘿（原作墨）を將て対する莫れ、と。未審いぶかし、什摩を將てか対えん。師云く、喫茶し去れ。

師、僧に問う、此の水牯牛は年多少ぞ。僧無对。師云く、七十七なり。僧曰く、和尚は什摩と為てか却つて水牯牛と作なれるや。師云く、什摩の罪過有りや。

・有什摩罪過 どういう罪でわしが牛に生れたと言つのか。

問う、古人に言つこと有り、仏向上事有ることを知りて、方はじめて語話はしの分有り、と。如何なるか是れ語話。師把住（原作柱）して云く、什摩と道うぞ。僧無对。師に踏まるることを被れり。

・古人 洞山。

問う、学人道い得ざる処、請う師道え。師云く、我は法の為に人を惜しむ。

師拳す、古来、老宿、俗官を引いて堂を巡りて云く、這裏に二三百の師僧有り、尽く是れ仏法を学ぶ僧なり。官云く、古人道う、金屑は貴しと雖も、と。又た作摩生。(老宿)無对。師拈じて鏡清に問う。鏡清代わつて云く、此来、搏を抛ちて玉を引く。

・老宿 臨濟。

・抛搏引玉 えびで鯛を釣ろうとしたんだ。

師、長慶に問う、古人道う、前三三、後三三、と。意作摩生。慶便ち出で去る。鵝湖云く、喏。

・古人 文殊。無著との五台山での故事。碧巖録三十五則参照。

師、弘子を拳して僧に示す。其の僧便ち出で去る。長慶、泉州の太傳に拳似して却つて云く、此の僧合に喚びて転ぜしめ、一頓の棒を与つべし。太傳云く、和尚は是れ什摩の心行ぞ。慶云く、泊んど錯つて放過せんとす。

・合喚転与一頓棒 呼び帰して一頓の棒をやるべきだった。(わしならそうする)。

・是什摩心行 なんたるやり口だ。批判の語。

・泊錯放過 すんでのところ無罪放免にするところだった。

滄山、仰山に問う、過去の諸聖は什摩処にか去れる。仰云く、或いは天上に在り、或いは人間に在り。師、拳して長慶に問う、仰山与摩に道う、意作摩生。慶云く、若し諸聖の出没を問わば、与摩に道うは即ち得たり。師云く、汝は渾来肯わず。或いは人有つて問わば、汝作摩生。对えて云く、但だ他に向かつて錯と道うのみ。師云く、老僧は即ち錯、是れ侏は作摩生。慶云く、何ぞ錯に異な

ら。

- ・ 若問諸聖出沒云 出沒を問うたのなら、そのように答えて好い。
- ・ 但向他道錯 間違っていると云うだけの話しです。

師、書状頭と為りて偈を造る、苦屈なり世間は錯つて用心す、低頭曲躬して文章を尋ぬ。妄情牽引せらるること何の年にか了らん、
靈台一点の光に辜負す。

- ・ 苦屈 なんともやり切れない。
- ・ 辜負 そむく。
- ・ 靈台 心のこと。

俗士有り、師に投じて出家せんとす。師、偈を以て之を住とむ。万里寸草無く、迴迴として煙霞を絶つ。歷劫常に是くの如し、何ぞ煩わさん更に出家することを。

師、僧に問う、什摩処より来たる。对えて云く、江西より来たれり。師云く、這裏は江西と相い去ること多少ぞ。对えて云く、遙かならず。師、杖子を拈起して云く、還た這个を隔つるや。对えて云く、遙かならず。師、之を肯う。

又た僧に問う、什摩処より来たる。对えて云く、江西より来たれり。師云く、這裏は江西と相い去ること多少ぞ。对えて云く、遙かならず。師、杖子を拈起して云く、還た這个を隔つるや。对えて云く、若し這个を隔つれば則ち遙かなり。師便ち之を打つ。其の僧却歸して雲居に拳似せり。雲居云く、世諦のときは則ち得たるも、仏法のときは則ち過無し。其の僧、雪峯に却歸して、前話を拳似せり。峯云く、者この老漢、老僧臂長ければ便ち二十棒を打たん。此くの如しと雖然いえども、老僧が這裏に十个を留取せん。

・世諦則得 この一句不可解。

・留取十个 十棒を保留する。

双峯、師を辞する時、偈を造りて師に与う、暫く雪嶺を辞して雲を伴いて行く、谷口に開無くして路は坦平。禅師愁えて別れを懐うて恨むこと莫れ、猶お秋月の如く月は常に明らかなり。師和すらく、但だ僧を抛ちて去くのみに非ず、雪原作雲嶺も相い関わらず。虚空に隔碍無く、放曠に縦横するに任す。神光は物外に廻か、豈に秋月の明に非ずや。禅子の出身する処、雷龍みて声を停めず。

・抛僧去 僧を見すてて行く。

師云く、世界闊きこと一丈にして、古鏡も闊きこと一丈。学人、火爐を指して問う、闊きこと多少ぞ。師云く、恰も古鏡の闊きに似たり。天竜拈じて問う、為復火爐はた、古鏡に与摩に大なることを置くや、為復古鏡、火爐に与摩に大なることを置くや。慶代わつて云く、与摩下に不明の字ありに人を弁ずることは猶お可なり。

・天竜拈問 雪峯を肯った上での問ではない。相対性の安易な否定の余地を与えまいとする問。

・与摩 弁人猶可在 そのように人を弁じてもよろしい。猶可は、ゝしてもよろしい、の意。在は強辞。

師、双峯と共に行脚して天台に遊び、石橋を過ぐ。双峯偈を造る、学道修行して力未だ充たず、此の身を將て嶮中に行くこと莫し。石橋を過ぎ得てより後は、即ち此の浮生是れ再生。師和すらく、学道修行して力未だ充たず、須らく此の身を將て嶮中に行くべし。石橋を過ぎ得てより後は、即ち此の浮生は再生ならず。

・自從過得石橋後 自從は二字で……してより、の意。

問う、学人は乍入藜林なり、乞う師、指示せよ。師云く、寧ろ自ら身を碎きて微塵の如くならしむるも、終に敢えて一个の師僧を瞎却せじ。

・乍林藜林 僧堂に入ったばかり。

・終不敢瞎却一个師僧 せつかく持っている自分の眼をあだにしない。

僧問う、四十九年の後は則ち問わず、四十九年前の事は如何ん。師、扠子を以て薫口に打つ。

・楞迦経卷三、「我従某夜得最正覚、乃至某夜入般涅槃、於其中間、乃至不説一字。亦不已説当説、不説是仏説」。

師上堂し、良久して便ち起ち来たりて云く、侂の為にし得て徹困なり。孚上座云く、和尚は敗闕せり。僧、清座主に問う、雪峯は過、什摩処に在りてか孚上座の肯わざることを招得せる。座主云く、若し与摩に道わざれば、争でか肯わざることを招得せん。又た孚上座に拳似す。上座云く、是れ骨と道う莫れ、皮も也た識らず。

・為侂得徹困也 お前たちのためをはかつて、わしはもうくたくたになった。

・争招得不肯 肯わざらしめたのも雪峯の徹困だ。

・莫道是骨云 骨どころか皮も知っていない。

問う、但有る施為は尽く是れ傍通鬼眼、如何なるか是れ正眼。師良久す。

・鬼眼 邪悪な神眼。

問う、古人に言うこと有り、我が眼は本と正しきに、師に固るが故に邪しまなり、と。如何なるか是れ我が眼は本と正しき。師云

く、未だ達摩に逢わず。僧云く、我が眼は何にか在る。師云く、師より得ず。

・我眼本正云 続高僧伝慧可伝に出る語。

問う、古人は今の什摩事に拠りて、四十二本の経論を去却せるや。師云く、汝須らく礼拝して始めて得べし。

・事 事情

・去却 除いてしまふ。

師、僧に示して云く、是れ什摩ぞ。对えて云く、一物に似ず。師便ち打つ。

・示僧 具体的に何かを示して。

僧、蘓州の西禅に問う、三乘十二分教は則ち問わず、祖師西来的的の意、只だ一言せんことを請う。西禅、拈子を豎起す。其の僧、肯わず。後に雪峯に到る。師問う、什摩処より来たる。对えて云く、西禅より来たれり。師云く、什摩の仏法の因縁か有りし。僧、前話を拈せり。師云く、汝は還た肯つや。对えて云く、作摩生か肯わん。師云く、作摩生か肯わざる底の道理を説く。对えて云く、什摩生か師に、境を將て人に示せと問わん。師云く、是れ汝、西禅より与摩に來たりて這裏に到るに、多少の林木を過却せしに惣べて是れ境なり。汝は什摩に因りて肯わざるならずして、只だ拈子を肯わざるのみなるや。僧無对。

此れに因りて師云く、尽乾坤是れ一个の眼、是れ汝諸人、什摩処に向いてか不浄を放たん。慶对えて云く、和尚は何ぞ重重に相い欺あなぐることを得たる。人有りて、此の語を持って趙州に拈似せり。趙州云く、上座若し閭に入らば、上座に一個の鍬子を寄せ去らん。翠岳、師の語を持って、踈山に拈似せり。踈山云く、雪峯は打つこと二十棒して、屎坑裏に向かつて推し著せよ。翠岳云く、和尚与摩に道うは、豈に是れ他の雪峯の過を打つならずや。踈山云く、是なり。岳云く、眼又た作摩生。踈山云く、心経に云つを見ずや、無

眼耳鼻舌身意、と。昂肯わずして云く、是れ和尚ならず。疎山無言。

- ・ 作摩生不肯 反語の場合は普通「生」はない。
- ・ 作摩生説不肯底道理 肯わざる底の道理をお前はどついう風に説くか。
- ・ 什摩生問師將境示人 境を以て人に示してくださいと師に問うことがどつしてできよう。問は、要求する。
- ・ 過却多少林木惣是境 随分林を通つて来ただろ、それは皆な境だろつ。
- ・ 和尚何得重重相欺 どうしてそうしつこく人を馬鹿になさるのですか。
- ・ 鎌子 眼に穴を掘るくわ。
- ・ 推向屎坑裏著 クソツボに突きこかしてやるつ。
- ・ 眼又作摩生 雪峯の眼はどうなるのですか。
- ・ 不是和尚 それは心経の話して和尚さんとは関係ない。

師、僧に問う、什摩処の人なりや。云く、磁州の人なり。師曰く、説くを見る、磁州は金を出だす、と。還た是なりや。对えて云く、不敢。師曰く、還た将ち得来たるや。对えて云く、将ち来たれり。師云く、若し将ち来たらば則ち老僧に呈似し看よ。僧展手す。師は之に唾す。

又た別の僧に問う、什摩処の人なりや。对えて云く、磁州の人なり。師曰く、説くを見る、磁州は金を出だす、と。对えて曰く、不敢。師展手して云く、金を把り将ち来たれ。僧便ち之に唾す。師便ち掴すること三五下す。

- ・ 磁州は焼物の産地で、金とは関係ない。
- ・ 僧展手 和尚さんの金を下さいといつしぐさ。展手は、貰つために手を出すか、何かを示すために手を出す。

師、僧に問う、名は何摩ぞ。惠全なり。師云く、汝の得人の処は作摩生。對えて曰く、和尚と商量し了れり。師云く、何摩処か是れ商量せる処なる。對えて云く、何摩処にか去き來たる。師曰く、汝の得人の処は更に作摩生。僧無對、棒を被れり。

師、長慶に拳似す。長慶云く、前頭の兩則は也た道理有るも、後頭には主無し。

・前頭兩則云 さっきの二回のわたり合いは頷かせるものがあるが、あとは主がなくなってしまっている。

・也有道理 非常に弱い肯定。

・無主在 在は句末の強辭。

師問う、何摩処より來たる。對えて曰く、藍田より來たれり。師曰く、何ぞ入草せざる。長慶、拳するを聞きて云く、嶮。

・入草 不詳。

僧の辭する有り。師問う、何摩処にか去く。僧云く、浙中に徑山を礼拝し去る。忽然も徑山の汝に問わば、他に向かつて何摩と道うや。對えて云く、問うを待ちて則ち道わん。師、之を打つ。

師、鏡清に問う、者个の師僧、過は何摩処にか在る。清云く、徑山問い得て徹因なり。師笑つて云く、徑山は浙中に在り、何に因りてか問い得て徹因なる。清云く、道うを見ずや、遠問して近對す、と。師頷して曰く、君は路辺に見む花表柱、天下忙忙たること惣べて一般。琵琶は拗揆して手に随つて轉ずるも、広陵の妙曲は人の弾ずる無し。若し人有りて能く解く弾じ得れば、一弾に弾じ尽くさん天下の曲。

常敬長老初めて參ぜし時云く、休経罷論の僧常敬等參ず、と。師は当時、声を造さず。明日早朝に來たりて不審せり。師云く、休経罷論の僧常敬在りや。敬便ち出で來たれり。師云く、老僧は休経罷論の僧常敬を喚べり、公の何摩事にか関わらん。敬云く、明君

に詔り有れば、臣に現れざること無し。師云く、適来詔りせしか詔りせざりしか。対えて云く、詔りせり。師便ち出でよと喝す。師に頌有りて曰く、世中に一事有り、奉じて勤む学者の取らんことを。半銭の活無しと雖も、歴劫の富を流伝す。天に登るに梯を借らず、地に遍くして行路無し。乾坤を包み尽くす処、禅子よ火急に悟れ。寅朝肯えて起きず、座を貧りて黄晡に昏し。魚の網に裏却せらるることを被り、獺師の肚を張破す。

朗上座問う、満目はれ生死。師云く、満目はれ什摩ぞ。上座便ち大悟せり。

常敬長老問う、元正の一旦、万物唯れ新たなり。未審いぶかし、真王還た春を度るや。師云く、四相に年老は転ぜらる、真王は春を度らず。敬云く、十二時中、何を將てか侍奉せん。師云く、触食は受けず。云く、忽然として百味珍饌の來たる時作摩生。師云く、太だ
与摩に新鮮生なり。

・未審真王云 真王もお正月をお迎えでしようか。

・将何侍奉 一体何を供養したらいいでしょう。

師、仏殿に入り、經案子を見て玄砂に問う、是れ什摩經なりや。対えて云く、花嚴經なり。師云く、老僧の仰山に在りし時、仰山經中の語を拈じて大衆に問えり、刹説、衆生説、三世一切説、什摩人の為に説くや、と。人の對うる無し。云く、子を養うんで老を代つ、と。此れを借りて鬮梨は作摩生か道う。玄砂遲疑す。師却つて云く、你、我に問え、我、你が与に道わん。玄砂便ち問う。師便ち面に向かつて拶身して云く、掴せよ、掴せよ。

報慈拈じて臥竜に問う、話は是れ仰山の話なり、拳は是れ雪峯の拳なり。什摩と為てか雪峯は掴を招くや。竜云く、子を養んで老を代つ。慈云く、草を打つて蛇を驚かす。

・養子代老 養子待老、積穀備飢ということわざ。代は待に通じる。

・遅疑 返事が出ずにもたもたした。

・打草驚蛇 そこつな出方をして相手に警戒心を起こさせる。

師、僧を見て云く、会するや。対えて云く、会せず。師云く、老僧は出頭せず、什摩と為てか会せざる。

・老僧不出頭 自分の自分たることを示していない。出頭は、顔を出すこと。

師、僧に問つ、汝に還た父母有りや。対えて云く、有り。師云く、吐却著せよ。別僧云く、無し。師云く、吐却著せよ。又た別僧云く、和尚問つて什摩をか作す。師云く、吐却著せよ。

・吐却著 はき出しちまえ。

・和尚問作什摩 なぜあなたはあんな下らん質問されたのか。作什摩は詰問。

師、衆に示して云く、明鏡に相い似て、胡来たれば胡現れ、漢来たれば漢現る。人有り玄砂に拳似す。玄砂云く、明鏡の来たる時作摩生。其の僧、雪峯に却歸して玄沙の語を拳似す。師云く、胡漢俱に隠る。其の僧、玄沙に却歸して此の語を拳す。玄沙云く、山中和尚は脚跟、実地を踏まず。又の時に玄沙、雪峯に上れり。師は一脚を収めて独脚にして行けり。沙問う、和尚、什摩をか作す。師云く、脚跟、実地を踏まず婆。

・脚跟 脚跟。

・……婆 俗語の語気詞。現代中国語の吧に当たる。

師、衆に示して云く、我れ尋常道つ、鈍漢と、還た人の会する有りや。若也人の会する有らば、出で来たつて我れに呈似せよ。我れ汝が与に證明せん。時に長生有り、出で来たつて云く、觀面峻、臨機峻。師云く、老子は方に親しく山僧が意を得たり。順徳云く、打水して魚頭痛む。師云く、是なり。

・長生出来云 和尚の方の働きについて言っている。

・臨機 相手を見て。

・老子 長生は年輩だった。おやじさん。

・順徳云 やられる方について言つ。

・打水魚頭痛 和尚さんの水のすくい方は、魚に頭痛を起こさせる。打水是、水を汲むこと。

師上堂して云く、某甲、岳頭、欽山と共に行脚せし時、店裏に在りて宿る次いで、三人各自に願有り。岳頭云く、某甲は此れより分襟の後、一個の小船子を討め得て、釣魚の漢子と一処に座して、一生を過却せん、と。欽山云く、某甲は則ち然らず。大州内に在りて、節度使の其の与に礼して師と為し、処分して錦襖子を著けしめ、金銀床に坐し、齋時には金華椀子、銀花椀子もて大槃裏に如法に排批し、喫飯して一生を過却せん、と。某云く、某甲は十字路頭に院を起て、如法に師僧を供養せん。若是師僧の発し去らば、老僧は鉢囊を提げ、柱杖を把つて他に送り、他若し行くこと数歩すれば、某甲は上座と喚び、他若し頭を廻らさば、某甲は途中善く為せと云わんと。自後、岳頭と欽山とは果然として是れ本願に違わざりき。只だ是れ老僧のみ本志に違いて這裏に住し、地獄の粗滓に造り得たり。

又た云く、江西湖南、東蜀西蜀、惣べて這裏に在り。当時、人の出でて問う無し。師、僧をして問わしむ。其の僧出で来たつて礼拝して問つ、未審し、這裏の事如何ん。師云く、地獄に入り去る。人有り、拈じて報慈に問つ、先師与摩に道つ、意作摩生。慈云く、闍老は望みを断てり。

・ 様子 皿。

・ 排批 ご馳走をならべる。

・ 鉢囊 相手の。

・ 送 さし上げる、贈呈する。見送る。

・ 善為 俗語 おだいに。

・ 造得地獄祖淳 自分が地獄のかすになってしまった。

・ 入地獄去 皆んな地獄に入っていく。

問う、古人に言うこと有り、無間業を招からざらんと欲得すれば、如来の正法輪を誘ふこと莫れ、と。如何にしてか誘らざることを得去らん。師云く、地獄に入り去る。

問う、如何なるか是れ涅槃。師云く、地獄に入り去る。

師、衆に示して云く、譬えば世間の两个の君子の如し、一个の君子は南方より来たり、一个の君子は北方より来たり、広野の中に相い逢えり。南來の君子、北來の君子に問う、何姓にして第は幾ばくぞ。北來の君子便ち摑す。南來の君子云く、某甲は五常の礼を行つ、過、何に在りや。北來の君子云く、某甲^す早是に便りを著けず。諸和尚、若し這個の況喩を領せば、山に住するも也た得たり、城隍に住するも也た得たり。

・ 第 家族の中での位置を示す数字。行第。

・ 某甲早是不著便 今日はどうもついてない。

・住山 出家。

・住城隍 在家。

師、西院に遊び了つて帰山する次いで、泯典座に問う、三世諸仏は何摩処にか在る。典座無對。又た藏主に問う、藏主對えて云く、当処を離れずして常に堪然たり。師便ち之に唾す。師云く、徐、我に問え、我れ徐の与に道わん。藏主便ち問う、三世諸仏は何摩処にか在る。師忽然として今の猪母子の山上より走り下り来たりて、恰も師の面前に到れるを見る。師便ち指して云く、猪母の背上に在り。

師又の時に問う、僧堂中に一千余人有り、争でか他は是れ竜、他は是れ蛇なりと委し得ん。又た今の消息を通ぜず。長慶云く、今の泌水の杖子有り。師云く、汝道え、我が這裏は作摩生。慶、放身して倒るる勢いを作す。師云く、この師僧、風を患い去れり。

・委得) 詳らかにする、知る。明らめる。俗語。元の時代まで使う。

・不通个消息 判断の手がかりがない。

・患風 神経の病氣。

滄山、仰山と一夜話をする次いで、滄山、仰山に問う、一夜の商量、什摩辺の事を成し得たるや。仰山便ち一劃す。滄山云く、若し是れ吾ならざれば、泊んど汝に惑わさるるを被らんとす。

人有りて長慶に問う、仰山便ち一劃す、意作摩生。便ち指を豎起す。又た順徳に問う。順徳又た指を豎起す。其の僧云く、仏法は不可思議にして、千聖同轍なり。其の僧又た師に拳似す。師云く、两个は惣べて古人の事を錯り会せり。其の僧却つて師に問う。師云く、只だ是れ今の横事なるのみ。

・一劃 空をさつと切つて線を画く。

・若不是吾云 ほかの奴だったら、お前にまるめこまれたであろう。

・其僧却問師 僧の最初の問。

・横事 とつぴょうしもないこと、まともでないこと。

師初めて出家せし時、儒仮大徳、三首の詩を送れり。光陰滄原作輪謝して又た春に逢う、池柳亭梅幾度が新たなる。汝は家郷に別る須らく努力すべし、將て大夫の身に辜負する莫れ。又云く、鹿群相守原作受りて豈に能く成さんや、鸞鳳は終に須らく万里に征くべし。何ぞ況んや故園は貧且原作与つ賤、蘓秦の花綿は事分明なり。又た云く、憲原は守貧志し移らず、顔回の安命更に誰か知る。嘉木は未だ必ずしも春前に熟さず、君子は従来用つるに時有り。

・相守 一家だんらんの様なもの。

・蘓秦花綿事分明 志を立てれば、蘓秦のような前例が分明にある。

師、僧に問う、什摩処よりか来たる。对えて云く、途中に涉らず。師云く、咄、這の蝦蟇叫。又た僧に問う、什摩処よりか来たる。对えて云く、江西より来たれり。師曰く、什摩処にか達摩に逢える。对えて云く、但だ達摩のみに非ず、更に有るも亦た逢わず。師云く、達摩有りて逢わざるや、達摩無くして逢わざるや。对えて云く、逢わずして什摩の有無をか説かん。師云く、既に有無を説かず、汝は何ぞ逢わずと道いしや。僧無对。

・有達摩不逢云 達摩が居ても逢わないのか、居なくて逢わないのか。

師、衆に示して云く、南山に鼈鼻の蛇有り、是れ汝諸人好く看取せよ。衆無对。慶代わつて云く、和尚与摩に道い、堂中多く人有

りて喪身失命せり。玄沙代わつて云く、那の南山を要して什摩をか作す。暉和尚頌して曰く、雪峯は養い得たり一条の蛇、南山に寄著す意若何ん。是れ尋常の毒惡物ならず、參玄は須らく得べし先陀を会することを。報慈和すらく、君に勸む嶮処に好く蛇を看よ、衝著すれば時に臨んで争奈何んせん。安身を得て物に負くことを免れんと欲せば、向南に北を看る正に先陀なり。

・有鼈鼻蛇　八ナベチャの蛇がいる。

・好看取　よく気をつけなさい。

・寄著南山意若何　南山にかこつけた意は。

・衝著　予期せず蛇にぶつかった時。

・争奈何　どうしようもない。

・免負物　物は蛇を指す。

・向南　みなみ。

師、樹撞子を指して長慶に問う、古人道う、色を見るは便ち心を見る、心外無余と。你是還た樹撞子を見るや。對えて云く、什摩をか見ん。師云く、奴に孤けり。慶云く、和尚に孤かず。師云く、你是孤かずと道い、我れは孤けりと道う。慶退くこと三歩して立つ。師云く、你、我れに問え、我れ你的と道わん。慶便ち和尚に問う、樹撞子を見るや。師云く、更に什摩をか見ん。

・樹撞子　不詳。

・孤奴　奴について敦煌文献語言詞典に「第一人称代詞、同我」と言つ。

問う、目撃して相い扣して、救捺を言わざる者如何ん。師云く、弥いよ也た急に相い投ぜんことを要す。又た盲人に値えり。師云く、我れ盲う、我れ盲う。

- ・ 自擊相扣 パツと見てそのまま問いかける。相扣は、意見を聞く、問う。
- ・ 教撻 ぶしつけ。
- ・ 相投 たよる。
- ・ 我盲我盲 物乞いの声か。

師は平生厚心に物を接し、行坐に機を垂る。天祐丙寅の間より、衆は一千七百に上れり。閩王四事供須して終始に替らず。開平二年戊辰の歳五月二日夜三更の初に遷化せり。春秋八十七、僧夏五十九、出世するもの三十九年なり。真覺大師難提の塔と勅謚す。

祖堂集卷第七